

夏が終わる気配

“冬来りなば春遠からじ”と英国詩人のシェリーが刻んだのですが、バージニア州の首都リッチモンドでムラサキツバメ (Purple Martin) をみると、“秋遠からじ”と感じられます。木の葉は緑のままでまだ色を変えていないし、蒸し暑い日々が続いているそんな中で、ムラサキツバメは、すぐそこに近づいている秋を私に報せるのです。

今まで知らなかったのですが、私の故郷であるリッチモンドに「Gone to the Birds Festival」というお祭りがあります。これは、リッチモンドの中心街にある梨の並木を占領するムラサキツバメを見て喜ぶための、あるいは見て感動するための祭りです。

ムラサキツバメは、北から移動してきて、約2ヶ月間リッチモンドに滞在した後、終点の南米へと移動します。北米では最大のツバメだそうです。体長は18~21センチくらいあり、濃い紫色の羽に覆われています。

今年初めて祭りに参加したのですが、祭り自体はそんなに感動するようなモノではありませんでした。駐車場でアイスを売ったり、才能の疑わしい奇術師がパフォーマンスをしたりしていました。米国でよくある「中途半端さ」の一例かもしれません。

そんな中で私が一番気に入ったのは、その梨並木のそばのレストランで出していた、Purple Martin (ムラサキツバメ) にちなんだ「purple martini」というカクテルでした。まず、観た感じがとても可愛いのです。私は紫色のお酒は飲まない主義ですが、飲んでいた人は皆幸せそうでした。



その人たちが黄昏を待っているのです。紫色のカクテルを飲みながら黄昏を待つという不思議な組合せは一体なんのためでしょう？それは、昼間に彼方此方へと飛んでいったムラサキツバメが黄昏迫る「自宅」へと帰ってくるからです。

その梨並木に戻ってくるツバメは2万羽以上に達するそうです。毎晩、それほどの数のツバメが梨並木に集まってくる光景は、見事なる熱狂です！私はその夜それを観て感動しました。

よく観察してみると、彼らが「帰宅」することは意外に困難です。リッチモンドは旧態依然とした古い街ですけれども、梨並木がある道路の周辺にはいくつかの摩天楼がそびえており、彼らの帰宅を邪魔します。彼らは梨の木へと各々が真っすぐ飛んで着陸するのではなく、まずは上空で集まって、ものすごく大きなグループを作るのです。そして帰宅の際には、そのグループごと、グルグル回りながら降りてくるのです。

そんなときも自然は残酷さを持っていま

す。綺麗な光沢を放つ可愛らしいツバメが梨の木へ帰ろうとするところを、鷹やハヤブサなどの猛禽類がハンティングのために待ち伏せているのです。周辺の摩天楼でじっと待っていた猛禽類は、ツバメを餌としてとるためにサーッと猛スピードで降りてくるのでした。

私が見た夜には、幸いにも、というか残念にもというか、猛禽達はハンティングに失敗しました。

2万羽を超えるツバメの大グループが梨並木の中へ入ると、聴いたことのない不思議な音が聞こえてきました。滝の下にいるような音とか、吹雪の真ん中にあるような音とか。すぐ隣にいた一人は、鳥たちが梨の木の葉を動かした結果出る音ではないかと推測していました。その音は、2万羽以上のツバメが一羽の巨大な神話上の鳥になったときに生じる羽音なのかもしれませんと私は想像しました。

季節の変化を私に教えてくれるもう一種の鳥がいます。ハチドリです。

私の実家の庭には毎年、8月になるとハチドリが訪れてくれるようになります。それ以前だと、餌箱にどれだけ蜜を入れてあげても来てくれません。

ハチドリは、鳥類の中で最も体が小さい鳥です。羽ばたく回数が毎秒数十回に達するためブーンという音が聞こえます。英語でハミングバード (Hummingbird) と呼ばれるのはそのためです。花の中にクチバシをさしこみ蜜を吸うという独特の食事の取り方をするため、クチバシはストローのような形状になっています。

先日、実家に帰った際、庭で朝早くコーヒ



ーをいただきながら、ハチドリのご臨席の栄を賜りました。動かずにじっと座っていると、次第に向こうが慣れてきて、近くの花の蜜を吸い、餌箱の赤い蜜を飲むようになりました。私の周りのかなり近くを、見えないほどに素早く羽ばたきながら飛びまわりました。その間は、妖精が訪れてきたような不思議な雰囲気を感じました。

古代ローマには、鳥の動きを見て予言を告げる鳥占官がいたそうです。鳥占官が「Gone to the Birds Festival」のムラサキツバメの圧倒的な動きをみて占ったら、どんな予言をしたのでしょうか？現代の私たちは、そんな自然現象から宗教的な意味を感じることをもはやできないのかもしれませんが、彼らの生態は深く心に響き、季節の変化の気配を感じます。地球上を占有しているかのようには振舞う人類でも、そのような自然の息吹から謙虚さを教わることがまだまだ可能だと思います。

筆者紹介

ネルソン・グラム

U.S. Attorney (Virginia Bar), Global IP Counselors, LLP 所属。

1981年米国バージニア州生まれ。ジョージ・ワシントン大学 (DC) で国際関係論を学びながら、ウルグアイ大使館でインターン。卒業後、2003年渡日、香川県三野町 (現在三豊市) の国際交流協会で一年勤務。うどんが大好物となる。帰国後、ジョージ・メーソン大学ロースクール卒。2008年8月からGlobal IP Counselors, LLPに弁護士として勤務。趣味は読書、運動。好きな言葉は「鳴かぬ蜜が身を焦がす」。